

# 文化 | Culture |

月、水、金、土曜日 掲載

## 使い続けて復興の拠点に

### 三井住友銀行 建物保存を

熊本大五高記念館客員教授 磯田 桂史



◇いそだ・けいし 1947年、玉名市生まれ。京都大学大学院修了。建設省や熊本県勤務、崇城大准教授を経て、2012年から熊本大五高記念館客員教授。著書に「熊本の近代化遺産」(共著など)。専門は熊本の近代建築史。熊本市在住。

三井住友銀行の熊本支店(熊本中央区魚屋町)が来年1月に移転する予定だ。現在の支店の建物は昭和9(1934)年に建てられ、一帯の新町・古町地区の歴史的景観を形づくってきた。移転後、建物はどうなるのか。熊本の近代建築に詳しい熊本大五高記念館客員教授の磯田桂史さんが、一帯の歴史と建物の価値について寄稿した。



熊本市中央区魚屋町の交差点にある三井住友銀行熊本支店の建物。支店は来年1月に新店舗へ移転する

先日、熊本市の新町・古町地区の自治協議会などから三井住友銀行あてに、熊本支店建物の保存及び利活用の要望がなされた。支店の建物は昭和9年に竣工し、以来約80年にわたり存在し続け、新町・古町地区の一つの大きな景観拠点となっている。地元からの要望は支店の建物に愛着を持つ市民の切なる願いである。熊本支店は、熊本市電の具服町と河原町の電停の間にある交差点の角に立地している。熊本支店、明治36年十八銀行熊本支店、明治38年九州商業銀行、明治41年旧肥後銀行、

## 歴史の蓄積 固有の物語つくる

大正8年第一銀行熊本支店である。交差点の南側には、米屋町通りを挟んで両側に東市原屋、西市原屋が店を構えていた。江戸期はともに酒屋として繁盛した。東市原屋は姓が岡崎であり、明治期その岡崎家の一員であった岡崎唯雄は、熊本の渋沢栄一と称されるほど、多くの会社の設立運営に関与した。また、県会議員、国会議員も務めた。万町に出店と工場があり、この建物は、現代に引き継がれ早川倉庫となっている。西市原屋は明治になって造酒から醤油製造に転換した。住友銀行(現・三井住友銀行)は、西市原屋の一部に大正14(1925)年9月支店を構えた。当初は西市原屋の建物を使い営業していたが、昭和9年に、現在の支店建物を建設した。竣工した同年12月には3日間にわたり2千数百名を招待し披露宴が行われた。支店の設計は、住友財閥管轄部門の伝統と人材を引き継いだ長谷部竹腰建築事務所である。設計事務所の名称に名を連ねた一人はともに東京帝大建築学科卒であり、当時国内のトップクラスの事務所であった。熊本支店の建物は列柱等の歴史様式を部分的にしか使わず、熊本市役所花畑町別館のようなモダンイズム建築の出現前後を示唆する逸品であり、上品な雰囲気漂わせている。内部には連続アーチがカウンター部分にあり、シンプルで、上質な空間となっている。このように語り継ぐべき街の多くの物語を内包し、かつての品格を保ってきた熊本支店の建物が空家になるという事態が近づいている。新町・古町地区には四つの登録文化財があるが、いずれもそこでは日々の生業が行われ輝きを放っている。熊本支店も登録文化財級以上の建物であり、使い続けることが望まれる。使われてこそ、物語が積み重なっていく。人に関する長い歴史、生活に関する長い歴史、建物に関する長い歴史等々が蓄積され、他所にはないその場所固有の物語が出来ていく。時あたかも熊本市は、「歴史まちづくり法」(略称)を活用して歴史を生かしたまちづくりに取り組み意向を表明している。歴史を生かしたまちづくりのためには、現存しているものの役割が重要である。目に見えるものはさまざま。まな想像をかき立てるからである。一旦建物が無くなればそこに何があったか急速に記憶が失われていく。三井住友銀行熊本支店の建物に利活用の道がひらけ、長い歴史が目に見える形がつながっていき、新町・古町の復興の拠点となることを願っている。